

む つ み

2 8 4

日本国語教師の会「樺の会」

第五十五回日本国語教師の会「樺の会」横須賀大会報告号

日本国語教師の会「樺の会」では、毎年八月に関東近県で夏季合宿研究会（通称：全国大会）を開催しております。第五十五回となる今年度は、四十六回横浜大会以来九年ぶり、神奈川県では四回目の開催となりました。

今年のテーマである「主体的・対話的に学びを深める国語の教室」は、前年度テーマ「学び続ける主体を育てる国語の教室」を受けて設定されました。また、今回のゲストの話には、立教大学名誉教授で小学校英語教育についての論考の多い鳥飼玖美子さんをお招きしたこともあり、パネルディスカッションは「これからの“ことば”の学びを考える」と題し、母語である国語の学習と小学校英語教育について、参会者の皆様とともに、考える機会といたしました。

第五十五回 日本国語教師の会「樺の会」横須賀大会

一 主題 ことばを育て人間を育てる

―主体的・対話的に学びを深める国語の教室―

主催 日本国語教師の会「樺の会」

後援 横須賀市教育委員会

二 とき 二〇一九年八月三日（土）～ 四日（日）

三 ところ ヴェルクよこすか

〒238-0006 横須賀市日の出町1-5

交通：京急横須賀中央駅から徒歩5分

宿泊：セントラルホテル横須賀

〒238-0007 横須賀市若松2-8

TEL：046-827-1111

交通：京急線横須賀中央駅徒歩1分

四 日程

【第一日】八月三日（土）

ヴェルクよこすかにて

1 受付 九：〇〇～一〇：〇〇

2 開会式 一〇：〇〇～一〇：一五

① 開会のことば

② 挨拶 大会委員長 濱田 芳子（神奈川県）

③ 祝辞 横須賀市国語研究会長 米持 薫（神奈川県）

④ 大会運営の連絡 大会事務局長 長谷川泰子（神奈川県）



3 はじめの話 一〇：一五〜一〇：四五

◇ことばを育て人間を育てる

—主体的・対話的に学びを深める国語の教筆— 松木 正子 (東京)

一、ことばを育て、人間を育てる

○ことばを持つということ

ことばを使うことで、考えることができる。ことばを話せても、文字とつながらない。だから不安になる。ことばにはどんな意味があり、どういうことばを使うのかを教えることは教師の役割。

○読書の量と学力

・読書量によって語彙に差ができる。↓読解力に差

たくさん読むことで志向する文脈を知る。…一年生の国語の教科書最初は絵を読みとり、口頭作文にして言い回しを覚え、文字を起すことで、ことばを学ぶ。

○人間を育てるためには

・獲得したことばを使う。…話す・書く・コミュニケーション

コミュニケーションの場でそのことばが使えるようになる。

・通じる喜び(分かり合えること・自己表現すること)…これがモチベーションになる。

二、「学び」をつくる…子どもとともに。教師も具体的姿から学ぶ。

○本気で勉強したいとき…学び方がわかり、自分で課題を見つけて追究すること。子どもが自分たちで創意工夫していく。

○三つの「や」…「やりたい・やり方・やったあ」が大切。

【記録 小野澤 由美子 (東京)】

4 研究発表 一〇：四五〜二二：〇〇

① 「感じる」ための、ことばの学習

関東学院小学校 村上 博之 (神奈川)

○子どもたちはどのように「ことば」を獲得しているのか。

言葉には三つの働きがある。(感じる・伝える・考える)

習熟期間への働きかけとして学習を行う。「ことば」を試しに使ってみようとする場を多く提供する。(日記、連絡の聞き取り、コンクールへの応募、新聞作り等)

○年間を通じた実践「今日の詩」小二(東京書籍)

授業の始め、五分程度を使い、年間を通して二百近い詩を紹介。発達段階に合わせた配列。実感を伴えるように、ねらいをもって適時配布。内容が子どもたちにとって難しいものは避ける。様々な理解、感覚が深まっていくのではと考えている。言葉を耕しながら、子どもを育てていく実践になることを願っている。

(宿題) 週三回詩の音読、週二回絵日記。

(例) 「春からでんわ」

↓しめしめ、そわそわ等、オノマトペによる文章の雰囲気の違いを味わってほしいと考えて紹介した。

◇特別発言

蓮沼 信子 (埼玉)

感性をいかに広げるか、育てるか。詩を読み、感性を育んでいく。声を出せる学習というのはかなりの成果があったのでは。単に詩を扱うだけではマンネリ化するので、ねらいをもってやるのが大切である。村上先生は様々な工夫をしている。ねらいを緻密に計画的

に行うことで、子どもたちの力が育まれていくだろう。

② 問題作り学習—昭和・平成・令和に受け継がれる国語の授業—

お茶の水女子大学附属小学校 廣瀬 修也（東京）

○問題作り学習の概念

石田佐久馬先生が提唱した「問題作り学習」は、数十年経った今でも行われている。「問題作り学習」とは、子どもたちが物語を読み、疑問に思ったことやもつと読み深めてみたいことを問いの形にして読み進めていく学習である。子どもが自分たちで考え、追求していくと決めた問いを授業で扱うと、学びへの意欲が変わってくる。主体的・対話的・深い学びにも対応した学習スタイルといえる。

○問題作り学習の実践『こんぎつね』の授業（二〇一七年度、四年）

○今後の展望と所感

「子どもに主体的な学習を期待する場合、問題作りはその到達点とどうか、終着点とどうか、とにかく主体的な学習に成就感、達成感をもたせる最上の学習であるといっていよいよ。」（石田佐久馬、1986）
今後は、問いの精選、教師の関り等を追求していきたい。

◇特別発言

蓮沼 信子（埼玉）

廣瀬先生はここ何年か問題づくり学習に挑戦してきた。積み重ねが子どもを育てている。問題作り学習における課題についてまとめていたが、課題を追っていくことで次に進める。この資料をじっくりと読んでほしい。今後、元号が変わるうが、教師が変わるうが、問題作り学習は生きていくだろう。ぜひ挑戦してほしい。

【記録 下脇 陽子（東京）】

5 実践報告分科会 一三：〇〇～一六：〇〇

◇低学年分科会

司会 根本 晶子（埼玉）

①教材文の読みを広げる説明文の指導

教材文の図鑑をつなげる手立ての工夫「じどう車くらぶ」

静岡県下田市立浜崎小学校 高橋 綾子（静岡）

・言葉を丁寧に扱った。「にだい（荷台／二台）」「はこぶ／のせるの違い」など、一見読めてはいるが、わかっていないことも多い。そこに教師が気付き、児童に話し合いの場を持たせることが必要。調べ学習に入る前に、図鑑の拡大コピーを示して「どれがしごと？どれがづくり？」をクラス全体で行い、「図鑑を読む」という経験をさせた。このワンクッションが個人の調べ学習へのよき手立てとなった。

○話し合い・生活の経験と結び付けて児童が説明することで、具体と文の言葉が結びつく。教師が子供の実態に気づくことが大事。

・与える図鑑について。簡単な図鑑、少し難しい図鑑など児童に応じて与えることで学習が進む。

◇特別発言

秋山 誠（東京） 加藤 智子（埼玉）

秋山…大変丁寧な指導。このような丁寧さが子どもを伸ばす。低学年は特に楽しくやりたい。楽しませるためには「作品にしたい。」という児童の気持ちを大切に。教師の側にそういう寛容さが必要。ここだけおさえたら、あとはフリーみたいなものも必要。

加藤…言葉が少ない低学年では、挿絵と文章をあわせて読んで丁度よい。作品の中の絵に時間がかかりすぎないように、以前一〇〇円

ショップで売っているシンプルな自動車の塗り絵を使ったことがありとてもよかった。この単元で「トミカ」は最高のモデルである。

② 自ら学び続ける児童を育成する指導の工夫 ～「おのおきなかな」

埼玉大学附属小学校 吉野 竜一（埼玉）

・「自ら学び続ける児童を育成するために」以下の四つの手立てをたて授業を行った。手立て(1)学びの履歴の提示、手立て(2)読みの履歴からの言葉かけ、手立て(3)構造的板書、手立て(4)選択できる学習活動、である。本単元ではお話の「おもしろさ」に焦点を当てて、思いや考えを持てるようにした。

○話し合い

・先生が課題を示すのではなく、子供から課題が出てくるように。「学習の手引き」にある「音読劇」や「動作化」をしてみるとよい。これらは、文で書かれたものを目に見えるように可視化させ、楽しみながらやっていくうちにわかっていく手法で、外せないところ。・ニールの言葉「教師は教師である前に一人の大人である。」教師は、「共に考える」が基本。先生も一人の子供になって共に考えていかないと文学の本当の楽しさが出てこない。

◇特別発言

秋山 誠（東京） 加藤 智子（埼玉）

秋山…大変勉強をされている。「学び続ける児童を育成する」には、先生自身が学び続けること。人の授業をたくさん見て、自分も授業を人にたくさん見てもらうこと。

加藤…挿絵のおじいさんの種の撒き方から、気付きを得て、想像を広げて楽しむことができる。そのような活動の後に、なりきりグッ

ズを使って音読劇などをするのも一つの方法。学びの履歴には、色々なものがあるので、選択できるとよい。

【記録 吉田 美紀子（埼玉）】

◆中学年分科会

司会 久保 由美子（神奈川）

①読む意欲を引き出し、自分の読みへ

～世界の物語ナビゲーターになろう～

教材…東京書籍三年「はりねずみと金貨」

横須賀市立久里浜小学校 筒井 由紀子（神奈川）

□手立て ①意欲を引き出す導入と単元ゴール設定 ②『やることパスポート』③ICT活用「Power Point」 ④前単元の応用 後書き ⑤一人一冊。『読書メモ』 ⑥『本とお話ししよう！ポイント』

⑦「言葉を大切に」教師のゆさぶり ⑧考えの深まりを実感

□活動の実際 ①原作の読み聞かせと感想交流 ②物語の大体をつかむ ③おもしろさなどを見付ける ④場面ごとのミニあらすじをまとめる ⑤あらすじをまとめる

□「世界の物語ナビゲーター特集」

・学習したことを生かしてナビゲーター特集を完成させ、交流。

□成果と課題・ネーミングを工夫して、付けたい力を明確に示したことで「考えながら読む力」と「紹介するために書く力」が付いた。子ども自身も自信をもち、本を通して友達との対話が増え、物語の世界を広げ、楽しむことができた。時間配分を考えたい。

◇特別発言

佐藤 博（岩手） 安田 恭子（東京）

佐藤切り口は授業者によって違う。知的好奇心を高める手立てによ

って交流が生まれ、子どもたちが自然に助け合いができています。ネットミングもうまい。教室の中で GLOCAL（グローバルローカル）な活動ができた。

安田：先生が強い願いを持ち、きめ細かに準備をし、しかけを工夫することで、子どもも楽しく学習することができた。先生も楽しんでる。読書メモの袋は、他の人の感想だけでなく、自分の記録も残していけるようにしてはどうか。

② 「主体的に文章と向き合う読み手を育てる説明的文章の学習」

教材：東京書籍四年下「くらしの中の和と洋」

お茶の水女子大学附属小学校 片山 守道（東京）

□教師の願い クリテイカル・リーディングして、文章と向き合って自分の考えを形成できるような学習を組み立てる。子どもの思いに寄り添い、「言葉への感度」を高める

□手立て①初耳度・スツキリ度・なるほ度②単元構成③つつこみ所

□授業の実際（全十二時間） ①導入 ②資料を集めている間に、文章を読もう！ ③「和室」と「洋室」について書かれていることを、自分なりにノートに整理する。④衣食住について、調べてまとめる ⑤分かったことを共有し、クラスで考察する⑤改めて「くらしの中の和と洋」を読み、筆者に対する意見を話し合う。⑥「日本のくらし」を書き、読み合う。

□本時の授業 八時間目（前項⑤）

・話し合いは、①肯定的な考え、②批判的な考えと分けて行った。

□成果と課題

・時間をおいて読み返したことは、自分の考えを持って客観的に文章と向き合って読むのに有効であった。『見えない筆者』が残念。

◇特別発言

安田 恭子（東京） 佐藤 博（岩手）

安田：自分のフィルターを通して、考えを整理し直すことは大事。教材分析の仕方を示してくれている。学習感想がすばらしい。書かせっぱなしにせず、掲示するなどして再度の価値付けをしてほしい。佐藤：子ども自身が物差しを持ってやり、思考が生まれる過程があり、やる気が持続する学習課題が設定されていた。子ども達が考えざるを得ないしかけになっている。文章の見方が増えていく授業。

【記録 前原 文江（東京）】

◆高学年分科会

司会 山田 浩子（埼玉）

①学びを楽しむ子を育てる国語授業

～学び方を学ぶ「研究室方式」の実践を通して～

―「ぼく」の窓に映る思い出物語を書こう―

静岡県富士宮市立東小学校 赤堀幸一（静岡）

○研究室方式の概要

- ①単元の見通しを持つ学習：初発の感想の交流。学習テーマの設定。
- ②研究室の開設・研究室ごとの学習：研究室ごとに学習課題を設定し、追及を進める。③研究所（学級全体）における学習：研究室の追及成果を発表↓学級全体で新しい学習課題を設定し考え合う。
- ③単元を貫く学習活動：単元の学習成果を生かした言語活動。

◇特別発言

濱田 芳子 (神奈川県)

- ・主体的学びにびつたり学習方法である。
- ・グループの課題作りが難しいけれど、稚拙な研究所でも構わない。
- ・ゴールは、論文を書かせるとよい。子どもの実態を知ることができる。また、自分が他のグループから学んだことを書かせて交流することで、自分のしたことが役に立ったという喜びになる。

◇特別発言

岡田 博元 (東京)

- ・授業をするにあたり、学級の文化作りをし、日常的にしていることが礎になっているところがよい。
 - ・自分の声が発せられ、自分の意見が生かされる喜びが意欲になる。
 - ・どの問いをどういう順番で、どこを追及させるのかという構造が有機的になるように課題の設定が重要となる。
 - ・家庭科でもこの方式を取り入れている実践例がよかった。
- ② 「読む」を生かして「書く」へと子どもが繋がる授業
- ―随筆で自分の見方・考え方を伝えよう(六年)―

●指導計画と指導の実際

横須賀市立公郷小学校 村越慎哉 (神奈川県)

- ① 「迷う」(日高敏隆)を読み、随筆の特徴や面白さを見つけて。
- ② テーマについて考えを深めるために事実や心情・様子を付箋に書き出す。
- ③ 付箋を並び替えて構成メモを作る。
- ④ モデル文「腹痛の恐怖」(さくらももこ)を提示し、見方や考え方を見直し、書き出しや終わり方を考える。
- ⑦ 推敲する。
- ⑧ 作品を読み合い感想を伝え合う。
- ⑨ 図書館に、児童が書いた随筆を置く。

◇特別発言

岡田 博元 (埼玉)

- ・この授業の行程が9時間では短いのでは。また、書く活動は個人差が大きいので、帯でやっていく等、時間と空間の工夫が必要。
- ・違うところがうまくいっている作品を交流して相互評価の場を作ると技を学ぶことができる。

◇特別発言

濱田 芳子 (神奈川県)

- ・随筆とは一つのテーマを持って書かれた散文。日記でもよい。例えると、論理的文章は政治家・責任がある。説明文は専門家・事実をありのまま。随筆は芸能人：自分が感じたことを自分の感性で書く。自由。独自性がある。
 - ・モデル文の影響は強いので教師のねらいに合わせて選ぶとよい。
 - ・同じねらいで勉強した仲間の感想が評価になる。評価シートは教師が項目を挙げるとよい。
- 【記録 水垂 弘枝 (埼玉)】

懇親会 一八〇〇〜二〇〇〇 セントラルホテルにて

◇表彰 20回 蓮沼 信子 (埼玉) 10回 岡田 由佳 (埼玉)

司会 廣瀬 修也 (東京) 横内 智子 (東京)

【第一日】 八月四日(日) ヴェルクよこすかにて

1 受付 九〇〇〇〜九二二〇

2 パネルディスカッション 九三三〇〜一二二〇〇

テーマ「これからのことばの学び」を考える」

パネリスト 金 瑠淑（千葉・聖徳大学）

塩野谷 純香（神奈川県立逸見小学校）

小野澤由美子（東京・お茶の水女子大学附属小学校）

コーディネーター 若林 富男（茨城・江戸川学園取手小学校）

新しい時代に求められる言語教育を考える。パネルとして、言語教育を専門とする大学の先生、英語教育や国語教育に取り組んでいる小学校教員の方々にご提案いただき、英語・国語それぞれの時間の中で行われる学びをどのように意味づけて、子どもの学びの総体として捉えていったらいいのかについて、フロアの方々とともに考えていきたいと思います。

（二）パネリストからの提案

「外国語活動」と「教科」としての英語

日韓の小学校英語教育から見えてきたこと（金 瑠淑）

韓国の小学校英語教育は、一八九一年より四年生以上で始まり、一九九七年より三年生から週2時間必修化され、その後二〇一一年より3、4年生で週2時間、5、6年生で週3時間となった。教科書も検定教科書が使用されるようになり、英会話中心からリーダーリング中心へと大きく方向転換させている。一方、日本では、外国語導入の本格的な導入は一九九〇年に入ってからである。

日韓の異なるカリキュラムが中学校英語教育に与える影響について質問紙調査を行った結果、日本の中学生は外国人とのコミュニケーションに関わる活動を楽しんでいた。一方、中学校教員は、日本では「教員の英語力、子どもの英語の格差」、韓国では「子どもの英

語力の格差、英語への興味」を課題としていた。両国のカリキュラムの違いが教員の認識の違いによく表れていた。韓国では小学校段階での格差を生じさせないこと等を最優先に考えるべきである。先日、全国学力テストの結果が公表され、日本の課題が見えてきた。

小学校英語教科化にあたって（塩野谷 純香）

〈小学校での英語教育の利点〉①国語等他教科に関連させた授業を組み立てやすい②子どもの興味関心や得手不得手を把握し、他の児童と関わりながら学ばせることができる③表現することに抵抗が少ない等があげられる。〈課題〉①ALITとの打ち合わせ時間が十分でない②教師によって趣旨理解に差異がある③英語力に自信がない教師がいる等が挙げられる。そこで、大学との連携や市教委の研修、専任教師が市内の小学校を回り授業を実施するなど英語指導力向上を図る取組が進められている。また、横須賀市では標準カリキュラム「ハッピータイム」を作成し、先行実施校や教育研究校の取組をモデルにして準備を進めている。

国語教育との関連においては、国語教育育成をめざす資質・能力は英語教育のめざすところと多くが重なり、国語で身に付けた力が外国語学習で必要となる。語順、発音、ローマ字等、国語と英語を比較しながら学ぶことで日本語理解が深まり英語への関心が高まる。今後、英語と国語で育まれた力がさらに確かなことばの力となっていくことを期待する。

帰国学級の子どもの英語と国語（小野澤由美子）

お茶小の帰国児童は、感想にもあるように、漢字や言葉の意味理

解以外にも、算数や理科などで学習用語を覚えるのに苦労している。ことばを使いこなせない、語彙が少ない、コミュニケーションがとれないのではという不安もあるため、帰国単独学級が存在している。英語を保持しなければ海外にいた意味がないという親の願いもある。

そこで、国語の授業で大切にしていることがある。「劇化」はその一つである。動作化を通して一つ一つ語句の意味と使い方を知り、表現を通して心情を探っている。「白いぼうし」では、動作化によりことばの意味を確かめ、登場人物の心情を読み取ることができたと実感し、劇を三人でやりきったという達成感、家の人に見てもらえたという満足感を味わっていた。また、説明文では、絵カードで段落構成の全体像を表す「ことばの可視化」を取り入れ、音読もしている。自分や友達の音読で内容を理解し、それがわかることを喜び、それが学びの実感、論理的に読む力につながっている。

今後帰国生のことばの学びでは、自信をもって日本語で思いや考えを伝えあえるように、確かなことば・豊かなことば・考えることばを身につけさせていきたい。

(二) パネリスト相互・フロアからの質問、意見への応答

金：韓国では母音が十個あり、発音の土台が日本と違い、子どもたちはよく聞きとっている。また、学校外でも学ぶ機会が多く、入学前にアルファベットは書いて入学してくる。教員の外国語能力も高い。

・ソウル近郊の小学校で、創造的な活動として演劇を取り入れ、学力向上につながっているという実践報告がある。

・韓国では三年生の二学期から文字指導をしている。文字を中心とした開発が必要。・交流活動は、韓国では今はあまりやっていない。・オーストリア・ウィンの幼稚園では、小さい時から自分のことばで発信することを行っている。ドイツでは、意見箱が設置され、自分の主張によって改善されるという取組がある。必要とされる英語力の根底にあるのはコミュニケーション能力である。

塩野谷：書くことについて、アルファベットを穴埋めに入れていく、英語の絵カードにアルファベットに記載するなど、英語に慣れ親しむようにしている。高学年では書き写す、なぞるなどいろいろなパターンのワークシートを用意。外国人の保護者に授業参観で協力してもらうなどの意味あるやりとりを工夫。外国の学校との交流を位置づけている学校も。外国人観光客にインタビュするなど、遠足や校外行事との関連の実践も。今後必要な英語能力は、コミュニケーション力、考えを伝える力、人間関係調整力。

小野澤：母語を大事に、日本語を大事にしたい。思っていること、考えたことを自分のことばで伝える力や相手を理解する力が大切。日本語と外国語とをうまく融合していけばいいのでは。

(三) まとめ

母語を充実させないと思考力は育たない。ことばの獲得のためには、英語、日本語ともに発達段階に応じた言語活動を取り入れながら地道に積み重ねていくことが大事。

3 記念撮影 一三：〇〇～一三：一五 【記録 久保 由美子（神奈川）】

4 ゲストの話 (記念講演) 一三〇一五〜一五〇〇〇

演題『「国語と英語」教育を考える』

講師 鳥飼 玖美子 氏 (立教大学名誉教授)

●政府主導による教育改革のはじまり

①臨教審 (1984~1987)

②学習指導要領改訂 (1989)

以降、政府の慢性的制度改革が続く。

●「グローバル人材」とは

(1) 語学力・コミュニケーション能力

(2) 主体性・積極性、チャレンジ精神、

協調性、柔軟性、責任感、使命感

(3) 異文化に対する理解と日本人とし

てのアイデンティティ

「グローバル人材の育成・活用の必要性

をもつとも痛切に感じているのも、経済社会が中長期的に活性化

することで直接のメリットを享受するのも、人材を採用する企業

等の側である。」

●新学習指導要領における国語教育

全教科を通して言語力の育成。国語科はその中核。

●新学習指導要領における英語教育

・週3コマの運用、検定教科書の扱い方、成績評価等、現場にのしかかる課題。

・教員免許制度についても改革すべき。



●高大接続Ⅱ大学入試改革

・センター入試の廃止、大学入学共通テストへ

・英語は四技能を標榜↓「話す力」重視↓民間試験利用

・英語力が上がるのであれば、このような政策は賛同できるが、本来的なコミュニケーション力は上がらない。

●コミュニケーションの六機能

①表出的機能②能動的機能③交話的機能、

④言及指示的機能⑤メタ言語的機能⑥詩的機能

・伝統的な四技能の枠組みを発展。

●外国語教育の新たな潮流(米国)の紹介

・異文化コミュニケーション能力の育成

・読み書きを基盤とする能力の育成が大切。

・異質性に気付く。橋を架ける前に差異を知る。

・母語と相対化するために自分を客観視する。そのために外国語を

学ぶことはよいこと。

・外国語は生涯学習。自己効力感と自立性が学びを継続させる。日

本の子どもたちには甚だしく欠けている。

●国語教育と外国語教育の関係

母語は思考の源。外国語学習の基盤は母語。母語で語れないことは、

外国語でも語れない。言語相互依存説。言語への感性を育てる。小

学校では、ローマ字と英語、音声の違い等を扱ったかどうか。

例:「スイミー」の「swimming」の違い▼谷川俊太郎訳は名作であるが、

原作とのズレが大きい。和訳・協力することの重要性が教えられて

いる。現作：作者↓ユダヤ系。「一体自分は何者か。」と悩むが、色々な人に出会い、「自分は違っていてよい。」と気付き、描いた作品。個人としての自分の人生の大切さが描かれている。日本語訳だけでなく、英語、イタリア語の原作を読んでほしい。

●AIが発展する世の中での英語教育について

AIは簡単な日常会話ができるが、論理的思考力がなく、相手の真意を組むことはできない。外国語を学ぶことは異文化への窓。自分の考えを外国語で発信していく。

【記録 下脇 陽子（東京）】

5 まとめの話

「学び続ける子を育てる

〜学びへの自信をどうやって育てるか〜」

河津町立南小学校

黒田 英津子（静岡）

粘り強く学び続ける子を育てるための国語の

授業のポイント

（一）あたたかい対話的な学びができる学習集団づくり

- ・ 先生の話だけでなく友達の話も徹底的に聴く「聴き合う」集団に。
- ・ 話し手を見て、温かい雰囲気、など反応しながら聴かせる。
- ・ 分かったつもり「いいです」でなく、言葉を変えて言わせる。
- ・ 「分からない」と言った子どもを大切に。言えるようにする為には学級全体が畏に陥るような課題を出し、試行錯誤させる事も有効。



（二）充実感のある授業

- ・ 子どもの心をどうゆさぶつていくか。様々な子の考えをコーディネートしていくのが教師の役割。
- ・ 課題に対する考えの「ずれ」を見つけて交流させ考えを深める。「比較する」という考えを使うと、話し合いが焦点化し、交流しやすくなる。（「注文の多い料理店」「大きなかぶ」の例）
- ・ 学びを外に開く（「実の場」を求める）という視点も大切。言葉は抽象である。それを低学年では動作化や劇化し具体化させ、高学年ではまた抽象化させる。漢字の習得同様、深い学びには意味理解が必要。そして教師の教材研究の深さが大きく関係してくる。子どもと一緒に学ぶことを楽しみ、子どもの言葉をよく聴いて楽しめる教師でありたい。

【記録 山田 浩子（埼玉）】

6 閉会式 一五～四五

- ① 会代表挨拶 山崎 和男（千葉）
- ② 参加者代表挨拶 帯川 理加（神奈川）
- ③ 大会連絡 若林 富男（茨城）
- ④ 閉会のことば 濱田 芳子（神奈川）

7 交流の集い 一七～〇〇

京急線横須賀中央駅前 居酒屋「北海道」にて

【記録編集 小野澤 由美子（東京） 若林 富男（茨城）】